



まいとりに मैत्री

No. 5 平成21年度 夏号 - 2009. 7. 8 -
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



<mEṢI> maitrī (マイत्री) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

薄暑のみぎり、皆様にはいよいよご清栄のこととお慶び申し上げます。
前回の総会に於いて編集役員を務めさせて頂くことになりました藤井明と申します。右も左も分からぬ若輩の私ですが、先達の御力をお借りし、より良い紙面作りのお手伝いの一端を担えるよう努力していきたいと思っています。どうぞ今後ともよろしくお願い致します。
藤井明 (編集責任)

《東洋大学の史跡を歩く》 4月29日 (水)

第2回目となった「東洋大学の史跡を歩く」。今回は中野区北部・江古田地区を廻った。早くも初夏を感じさせる心地よい陽射しのもと、たくさんの史跡を訪れることができた。

「みずのとう公園 (野方配水塔)」は、急激な都市化に対応するため1930年に完成した配水塔。現在は災害時の応急給水槽となっている。宗教建築のようにも見えるエキゾチックな外観で、江古田のシンボルとなっている。

「蓮華寺」は、東洋大学の学祖・井上円了の墓所がある日蓮宗の寺。井桁の上に円形の石を乗せた独特の墓石は、円了の発意で自らの名を表したもの。深々とした緑溢れる境内には、松尾芭蕉の句碑がある。また、浄行菩薩が像の姿としてあるのは珍しいそうだ。(板野会長談)

「哲学堂公園」は、円了が1906年に精神修養の場として開設した。現在は中野区立公園となっている。グラウンドで野球をする子供たちを眺める、円了のお孫さん・井上民雄さんをお見かけした。公園内は哲学的世界観を表現した造りになっており、一種のテーマパークのようで面白い。理性島・概念橋など名称もユニークである。種々の植物が植えられており、花の名所としても名高い。

「江古田ヶ原・沼袋古戦場」は、哲学堂公園から野方六丁目に至る新青梅街道沿いの一帯で、1477年に太田道灌と豊島泰経が激戦を繰り広げた。その碑が江古田公園にある。毎度のことながら、解説をしてくださる出野先生の博学ぶりには驚かされた。

「新井山梅照院薬王寺」は、新井薬師として親しまれ、境内は観光客や地元の人々で賑わっていた。本尊の薬師如来には眼病治癒の利益があるとされている。個人的には、金の勺を持ち緑色の童姿をした聖徳太子像がかわいらしかった。帰り際に立ち寄った喫茶店「蜜蜂」は、偶然にも井上民雄さん行き付けのお店だった。様々な円了グッズが置かれた店内で、店主の方と話が盛り上がった。民雄さんと渡辺先生は電話でご歓談されていた。

(インド哲学科2年 関野美奈)

【目次】

活動報告	……1	書籍、イベント紹介	……8
コラム「仏教人物列伝」④	……5	活動写真集	……10
コラム「日本文化と仏教」④	……7	今後の活動予定	……11

《宮本先生と行く中山法華経寺・柴又帝釈天めぐり》 6月7日(日)

当日は晴天に恵まれた。宮本先生のご案内の下、日蓮上人ゆかりの中山法華経寺へ。宗祖日蓮聖人を祀る祖師堂は、屋根を二つ並べたような比翼入母屋造りが特徴的であり、その手前には1本の木柱が立っている。これは柱を天と地を結ぶ役割を担う物として考える思想を寺院が取り入れたもので、この柱信仰は仏教発祥の地インドとも共通しているのだそうだ。時に談笑も交えながら、祖師堂と共に重要文化財に登録されている五重塔や、宇賀神堂、伊藤忠太設計の聖教殿などを巡った。

最も印象的だったのが、初祖日常聖人から勘当された日頂上人が涙を流しながらその周囲を歩いたと伝えられる「泣銀杏」だ。その悲しげな伝承とは裏腹に、銀杏の木は初夏の陽気の中堂々と立っていた。中核となる老木の周りをいくつもの若木が取り巻き、ひとつの大樹のような様相を呈している。空へ向かって力強く伸びる枝に茂った青葉を見上げると、太陽の光に透けて輝いて見えた。この木を眺めていると、樹木の持つ生命力への畏敬が柱信仰につながったというのにも頷ける。

昼食後、柴又帝釈天として知られる経栄山題経寺を参詣し、法華経説話を題材とした帝釈堂木彫を鑑賞した。続いて和洋折衷の建物と純和風庭園の美しい山本亭を見学し、最後に「矢切の渡し」から江戸川を横断した。渡し舟に乗っている最中、川で泳いでいる蛇を見かけた。その時、宇賀(ウガヤ)は白蛇を意味する言葉であるという、先の宇賀神堂での宮本先生の言葉をふと思い出し、不思議な巡りあわせを感じた。

その後辞典で調べてみたところ、宇賀神は弁才天とも同一視される福神であることがわかった。弁才天はもともと河川の女神サラスヴァティーであったことを思うと、宇賀神に参ったその日に川で蛇(残念ながら白蛇と言うよりは黄味がかかった体色ではあったが)に出会うというのも、なかなか縁起の良い出来事だったのかもしれない。

(インド哲学科2年 大川詩織)



<東洋大学仏教青年会・仏教会創立一周年の仏教講演会及び聲明公演を開催しました！>

《滝田栄氏講演会》

東洋大学仏教会・仏教青年会は今春創立一周年を迎えた。特に東洋大学の学生組織である仏教青年会は、1908年(明治41)10月25日に有志7、8名が発起人となり、東洋大学学長・前田慧雲(第二代学長)を初代会長、副会長を境野黄洋(後に第四代学長)として結成された。その後、戦時中になって活動は途絶えていたが、おおよそ百年ぶりに再興されたわけです。

本年はこの創立(再興)一周年記念事業にふさわしい講演会を開催するということで、仏教に造詣が深い俳優の滝田栄氏に講演を依頼した。

滝田氏は俳優業の傍ら、ヨーガ(坐禅)を楽しみ、仏像の彫刻に没頭していることで知られますが、今回はその機縁となった話を中心に、「私と仏教」というテーマの講演であった。氏の講演は、俳優としての役作りの中で臨濟寺という禅の修行専門道場に入った仏教との触れあい、俳優という競争社会の中で生きることの苦しみ、その中で仏教を通して生きる力を見出していったことなど、ユニークな体験談を交えたお話しをして頂き、多くの聴衆の感銘を誘った。

滝田さんは昨今、等身大の不動明王を完成させた。その模様は御著書『滝田栄 仏像を彫る』(毎日新聞社刊行)の中で述べられているので、興味のある方は是非一読されたい。

(インド哲学科教授・仏教会会長 渡辺章悟)

《文学部伝統講座・声明公演の開催》

滝田氏の講演に引き続き、インド哲学科が主催し、これに仏教青年会・仏教会が協力して井上円了ホールにて、声明公演を開催いたしました。この声明公演は、東洋大学文学部伝統講座の一つで、日本文化への意識と理解を深め、グローバル化が進む現今の精神文化の状況において、本学学生の日本人としてのアイデンティティーの確立に貢献するために設けられ、今年で4年目になります。

今年度は、「語りの源流—涅槃会(ネッヱ): 釈尊への追慕」と題して、真言宗豊山派の迦陵頻伽研究会をお招きして、仏教音楽の心髄を公演して頂きました。

この会の名称、迦陵頻伽(かりょうびんが)とは、ヒマラヤ山や極楽浄土に住み、美しく妙なる鳴き声を持つとされる想像上の鳥の名前です。当日の公演はそのような妙なる声が響きわたりました。

この公演「涅槃会」は、鎌倉時代前期に仏教復興に活躍し釈尊の故地インドへの渡海の夢を持ち続けた明恵(ミョウヱ)上人高弁(1173-1232)に由来する、『四座講式』(「涅槃講式」「十六羅漢講式」「遺跡講式」「舍利講式」の四種からなる)のうち、最も古い形式を保っているとされ、真言宗豊山派総本山長谷寺に伝わる「涅槃講式」と遺教経(ユヱキョウキョウ)詠唱を含む常楽会(ジョウラクケ)とも言われます。周知のように「講式」は、日本語の「語り」文学の源流でもあり、日本語学の貴重な研究資料ともなっています。

この公演の最後に、数名の僧侶による六大といわれる勇壮な太鼓もあり、観衆は皆堪能したようでした。同時に開催されていた全国学会の中世文学会会員の参加もあって、約600名の来場者を得て大盛会でした。

(インド哲学科教授 橋本泰元・渡辺章悟)

《特別セミナーの開催》

まいとりのNo.5 2009年7月8日

6月24日(水)の定例研究会は、「スリランカのレポート」というテーマで、お二人を招いて特別セミナーを開きました。

最初に東京大学大学院で南伝仏教の律蔵を研究している青野道彦氏に「スリランカ仏教史の概観」を解説して頂き、続いてスリランカの難民児童の教育と福祉の活動を行っているサムアイランドライフ代表の石井照彦氏(仏教会会員)に活動の報告をして頂きました。

当日は30人を超えるほどの参加者があったが、なかにはスリランカやタイ、モンゴルからの留学生、ニュージーランドから来日中だった仏教学者も参加し、大学の授業には見られないほど質問も多く、実に有意義なセミナーでした。以下は石井さんの寄稿文です。

NPO 法人 サムアイランドライフ・石井 照彦 (仏教会会員)

私たちはスリランカの難民児童の教育支援や地域経済の活性化などを通じて、スリランカの人々の教育と福祉の向上に対して寄与することを目的として昨年設立されたNPO団体です。

この度は、私の大学院時代の恩師である渡辺章悟先生のご好意により、仏青の定例会に於きまして、二回ほどスリランカの現状や私たちの活動についての報告をさせていただく機会を設けていただきました。多くの学生や一般の方々にもお集まりいただき、つたない話でしたが、お集まりくださったみなさま方に私たちの活動内容を聴いていただく事ができました。



ご存知のようにスリランカは内戦、民族紛争、或いは少数民族であるタミル族の独立運動とも言われる長い戦いに終止符を打ち、平和な国家作りの第一歩を歩み始めたばかりです。この長きに渡った内戦は、スリランカの人々に精神的にも、経済的にも大きなダメージを与えました。私たちはこのようなスリランカという国に対して、子どもたちの教育支援や経済的に遅れた地域への支援活動を目的に活動しております。

具体的な活動としては、現地の社会福祉施設である、S.S.C.D.Foundation、S.C.D.Foundationの活動に対する支援を行っております。この二つの団体は、かつて全社協で社会福祉を学んだ研修生が設立した団体です。スリランカは前述のように長く続いた戦争や、津波といった自然災害の影響によって、大きな経済格差が生じ、多くの地域の子どもたちがきちんとした教育を受ける事ができない状態にあります。そのような現状に対して、S.S.C.D.Foundationでは、津波や経済的な理由で家や家族を失った20数名の子どもたちが施設で生活をしながら学校に通っています。またS.C.D.Foundationでは"Smile back to life"という奨学金制度を設けて、貧困な地域の子どもたちが教育を受けられるような活動を行っております。どちらも現地の人が自分の国をよくしたいという思いで活動を行っておりますから、考え方や目的意識なども非常にはっきりしています。そして私たちは彼らの接している現場に則した必要な援助を行う事が可能となります。

私たちは、里親や学生ボランティアの募集、或いはフェアトレードにしても、何よりもスリランカに興味を持っていただき、支援を通じてよき理解者としてのパートナーシップを持っていただける事を大切にしていきたいと考えております。そしてそのようにスリランカを知っていただく事が私たちの活動の第一歩であると考えております。

～ コラム「仏教人物列伝」④ ～

ゴータマ・ブッダ その四

今回は正確に言うならば「⑤降魔」の前に位置する、苦行とその放棄を中心に見てまいります。降魔について、成道の経緯についての詳細は次回になります。

⑤降魔——菩薩はアーラーラ・カーラーマ仙とウッダカ・ラーマプッタ仙のもとで禅定を習得しながらもこれを見限り、次に苦行を行います。どのような苦行を行われたのか、初期仏教聖典（『中部』）の記述に従いながら見てまいりましょう。

ウルヴェーラーのセナーニガマ（今のブッダガヤーの近く。後世の伝承によれば、乳糜を捧げたスジャーターはこの集落の長の娘であったとされます。右の写真はスジャーターの家跡に建てられたとされるストゥーパ址。）という場所に来て、相応しい場所であるとして、ここで苦行を行うことにしました。苦行を始めようとする菩薩の頭に3つの譬喩が浮かびます。

①水に浸かった、しかも樹液たっぷりの生木の木片を火鑽り白にして、火鑽り杵で火を起こそうとする人、②水に浸かってはいないけれども、まだ生木の木片で火を起こそうとする人、③水に浸らず、かつ乾燥している木片で火を起こそうとする人という3種の人の譬喩です。



それぞれ、①は欲の対象から離れずに暮らし、内に欲を断たずに激しい苦行を行う沙門・婆羅門、②は欲の対象から離れて暮らしながらも、内に欲を断てずに激しい苦行を行う沙門・婆羅門、③は欲の対象から離れて暮らし、しかも内に欲を断って激しい苦行を行う沙門・婆羅門を譬えたものです。①と②の沙門・婆羅門はどんなに激しい苦行を行っても、また行わなくても、覚めることは不可能です。③の人は、実を言うなら、激しい苦行を行おうが、行うまいが、覚めることが可能です（初期仏教聖典では成道以前のことは原則的に釈尊の回想として語られるため、ここには成道後の釈尊の見解が含まれています）。なお、付け加えますと、苦行が火を起こす行為に譬えられるのは、サンスクリット語の「タパス」（苦行）が「熱」を意味するからです。

まず、「歯に歯を置き、舌で顎を押し、心で心を押さえつける」苦行から開始します。すると菩薩の両脇から汗が流れ出ました。次は呼吸を止める苦行です。口と鼻を塞いで息の出入りを遮断すると、耳から息が入り出すとのこと。そこで耳も塞いでしまいます。すると、ものすごい頭痛が襲ってきます。そのつらさは「力持ちの人に刀で頭上を切りつけられるよう」とか、「力持ちに丈夫な革ひもで頭を巻きあげられるよう」とか表現されています。また激しい腹痛にも襲われ、「肉屋さんに牛用の小刀で腹を切開されるよう」と譬えられています。さらには身体が熱くなり、その熱さは「二人の力持ちが非力の人の腕をつかんで炭火の坑に無理やり押し付けて焼き焦がす」さまに譬えられています。

ここまでの苦行について、菩薩が「開始した精進は不退であり、現前した念は不乱であったけれども」、菩薩の「身体はこの苦の精勤に征服されて激しく動き、安息ではなかった」と付け加えられています。この「現前した念が不乱である」という表現は、他の経典では初禅に入る前段階を指しています。菩薩は先に見たところの③のタイプ（欲の対象から離れ、しかも内に欲を断っているため、激しい苦行を行おうが、行うまいが、覚めることが可能な人）なのですが、苦行が邪魔になって先に（四禅へと）進めない状態になっているとも解釈できます。仏教は一般に苦行を禁じたように思われていますが、頭陀行が認められるところからも知られるように「苦行を行ってはならない」と説かれることはほとんどなく、苦行は無意味であって（毒にも

薬にもならない）、要は、内面・心のあり方であるというのが仏教の建前です。しかしこの記述によれば、苦行は禅定を妨げるようです。

次に菩薩は断食を思い立ちます。完全な断食を行おうとすると「完全な断食を行うならば、神々が天の滋養をあなたの毛穴から注入する」と降りてきた神々に言われて、菩薩はそれでは表向き苦行に見えるだけで欺瞞になってしまうということでこれを断り、絶食を断念して、いろいろな豆の汁を少量ずつ摂取するという極度のダイエットを行います。菩薩がいかに痩せ衰えたか、その様は次のように生々しく描写されています。手足は蔓植物の節のように関節がでっぱり、臀部は骨盤があらわになってラクダの足のようになり、背骨は紡錘の連なりのようにでこぼこがはっきり浮き出て、肋骨は折れ、眼はくぼみ、頭皮に皺がより、少々誇張がありましょうが、腹の皮に触れると背骨をつかむことができ、背骨から腹の皮をつかむことができたときまで言われています。身体を摩擦すると体毛が毛根から抜け落ち、極めつけは、用を足すための姿勢がとれなかったといえます。和式トイレで日本人にもおなじみのスタイルですが、あの姿勢は腿と腹にある程度肉が付いていなければとれないようです。また菩薩や仏陀の肌の色は伝統的に金色とされますが（仏像に金箔が貼られるのはそのためです）、苦行がたたって、すっかりその輝きを失ってなっていました。体重を気にする方、ダイエットはほどほどに。

ここまできて菩薩に「過去・現在・未来の如何なる沙門や婆羅門も、これ以上の苦行を経験することはない（これを過ぎれば必ず死んでしまうから）」という確信を得て、覚りへの道は他にあるのではないかと考えます。すると、かつて父・浄飯王が儀式（農耕祭のようなものであったとされています）を執り行っている最中に、ジャンプ樹の木陰に坐りながら禅定に入った経験を思い出して、「きっとあれが覚りに通ずる道であろう」と思いましたが、その禅定に入るには体力が衰え過ぎており、そこで苦行を放棄して粗食を取り始めました。さて初期仏教聖典では、つづいて菩薩が体力を回復してその禅定（初禅）に入り、つづいて第二禅、第三禅を経て第四禅に達し、三明を獲得して成道する次第が記述されていますが、これを読んでいる方はすでに気になっておられるでしょう、ここには降伏される魔も、乳糜を捧げるスジャーターも登場しておりません。降魔については次回に見ることにして、スジャーターについて触れておきます。

一般的にスジャーターによる乳糜供養が苦行の放棄を示すと考えられがちですが、これは誤解と言ってよく、後代の仏伝において、スジャーターの乳糜は、どちらかといえば、成道前の最後の食事であることが強調されています。釈尊は成道後 49 日の間食事を摂らなかったともされるため、これはたいへんな滋養を含んだ食事だったこととなります。また乳糜をささげる娘の名を「スジャーター」とするのはあくまでも一部の伝承であり、他方では、これをナンダーとナンダバラという二人の少女とする伝承もよく知られており、こちらではたいへん美しいロマンスが語られます。



後世の一部の仏伝に説かれる苦行の場所について補足しておきますと、ブッダガヤー出身のインド人ガイドは、菩薩の6年間の苦行の地をブッダガヤーの北東に位置するダウンゲシュワリと呼ばれる山の中腹にある洞穴であると教えてくれました。これは玄奘三蔵が『大唐西域記』に伝える「前正覚山」のことです。これは『根本有部律破僧事』にも記されています。菩薩が二人の少女から受けた乳糜を食した後、成道を期してこの山に登って結跏趺坐したとたん、山が耐えられずに砕けてしまったそうです。実際に訪れてみますと、左の写真の通り、発破でもかけたかのように大きな岩がごろごろしている山です。

(インド哲学科講師 岩井昌悟・仏教会事務局長)

～ コラム「日本文化と仏教」④ ～

歌は空仮中に通ず 中世文人の仏教観

まいとりにNo.5 2009年7月8日

『小倉百人一首』の作者藤原定家の父俊成(1114～1204)は勅撰集『新古今和歌集』の選者を務めた当時の歌界の権威で、自身も高名な歌人だった。ほぼ同年代の西行と親しく交友し、西行の歌才を誰より認めていたのも彼である。

その俊成は歌論書『古来風躰抄』で歌をつくるという行為について、天台止観の「空仮中」の三諦をひきあいに出して、こう述べている。

かの天台止観と申す文のはじめの言葉に、「止観の明静なること前代もいまだ聞かず」と、章安大師と申す人の書き給へるが、まづうち聞くより、ことの深さも限りなく、奥の義も推し量られて尊くいみじく聞ゆるやうに、この歌の良し悪しき深き心を知らんことも言葉をもて述べがたきを、これをよそへてぞ同じく思ひやるべき事なりける。

さて、かの止観にもまづ、仏の法を伝へ給へる次第をあかして、法の道を伝はれることを人に知らしめ給へるものなり。(中略)

歌も昔より伝はりて撰集といふものも出で来て(中略) 深く心を得べきなり。たゞし、かれ(止観)は法文金口の深き義なり。これ(歌)は浮言綺語のたはぶれには似たれども、ことの深き旨も現はれ、これを仏縁として仏の道にも通はさむため、かつは煩惱すなはち菩提なるが故に、法華経には「若説俗聞経書略之資生業等皆順正法」といひ、普賢観には「なにもものか是罪、なにもものか是福、罪福無主。我心自空(ハツ)なり」と説き給へり。よりにて、いま、歌の深き道も、空仮中の三躰に似たるによりて、通はして記し申すなり。

歌は戯れの狂言綺語にすぎず、しょせん凡夫の煩惱の所産ではあるけれど、しかし、それも徹底して精進して極め尽くせば、言語では表しがたいものをも表し得るし、それが仏縁となって仏道修行になる。法華経も説いているように、歌の真髓は空仮中の三体に通じるといっているのである。

さらにそれから二百年後の室町中期、心敬(1406—1475)という歌と連歌で高名な真言僧がいた。権大僧都にまで上った高僧だが、歌や連歌と仏道の統一を目指して著した歌論書『ささめごと』にも、俊成に仮託したこんな話がある。

俊成卿、老後に思へるとなむ。「人には必ず一大事あり。この道にのみふけり、只今の当来を忘れ侍る事、妄想なるべし」とて、少し此の道になづむ心出でき給ひしに、住吉大明神あらたに現じたまひて、うち笑みしめし給ふ。「歌道をおろそかに思ひ給ふ事なかれ。此の道にて必ず往生をとげ給ふべし。歌道即身直路の修行也」とあらたにのべ給ひしと也。

少しばかり陳腐なドラマ仕立てだが、歌の神である住吉明神が現れてにっこり笑いかけ、必ず往住できるから安心しろとお墨付きをくれたというのである。

彼らにとって芸術や美に淫した後悔は、恐れに近いものがあった。鴨長明(1157?～1216)の『発心集』にも花に執着して蝶に生まれ変わった男の話がある。

「なんてことだ。自分は死んだらどこへ行くのか。何に生まれ変わってしまうのか。こんな生きかたをしてしまったからには、とても極楽往生などできそうもない。殊勝に経の一つも読んでいたほうがまじだったのに……」

大歌人の俊成でさえ、老いてはさぞや思い悩んだに違いない。が、しかし、「煩惱即ち菩提」「歌道は即身(成仏)の直路の修行なり」なのだ。

とりかえしのつかない後悔と恐れから逃れて自分の人生を肯定するには、そう開き直すしかなかったのである。それは中世の文人たちの共通認識であり、いってみれば免罪符だった。

こうして、歌道以外でも、能、茶道、華道、芸能、はては武術にいたるまで、すべて仏の真理を求め、表現するものであり、修行の一環とみなされようになった。日本文化の一つの大きな特徴である。

(大学院仏教学専攻 永田道子)

～ 書籍・イベント紹介 ～

《書籍》

・『新装版 仏典の読み方』

金岡秀友/著

「仏教は難しい」という現代人の嘆きに応えるため、長年仏教の経典（仏典）を研究してきた著者が、東洋大学での講義を元に仏典の概要や歴史、構成を解説。2009年8月上旬（大法輪閣 2205円 ※8月上旬発売予定）

・『ポケット親鸞の教え』

山崎竜明/著

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」で有名な、浄土真宗の祖師・親鸞。親鸞の教えに気軽に触れることができる。（中経出版 600円）

・『私の「般若心経」 中高生にもわかるやさしい 仏教入門書』

小野和雄/著 板橋興宗/著

安らぎと平安をもたらすこの、一冊。初めて読む人の心に素直になじむ入門の手引き。経文を一行ずつやさしくかみくだいて解説します。（文芸社 1155円）

・『ブッダ八大聖地をゆく 仏教の起源をたずねて』

伊藤明磨/著

ブッダはどこで生まれ、どんな地を歩んだのか—仏教における重要な8つの聖地を、数々の写真で綴る。写真でブッダの足跡をたどった一冊。（法蔵館 2520円）

・『唯識で読む般若心経』

横山紘一/著

般若心経の経文にそって、唯識の考え方を解く。（大

法輪閣 2835円）

・『仏典を読む—死からはじまる仏教史—』

遊行経・無量寿経・法華経・般若心経・摩訶止観・碧巖録・日本霊異記・山家学生式・即身成仏義・教行信証・正法眼蔵・立正安国論・妙貞問答（ハビアン著）の13の仏典について、その思想を読む。（新潮社 1890円）

・『寺よ、変われ』

高橋卓志著

「いのち」と向き合って幅広い社会活動や文化行事を重ね、地域の高齢者福祉の場づくりにも努めてきた僧侶が、その実践を語り、コンビニの倍、八万余もある寺の変革を訴える。（岩波書店 819円）

・『お浄土への地図』

小林顯英/著

法栄寺・全住職が書いた法話集。短編形式でまとめられた各法話は、具体例が多く著者の遇法のよろこびが読者のむねに響いてくる、心が洗われるような一冊。（探究社 1890円）

・『アビダルマ仏教の研究—時間・空間・涅槃—』

那須円照/著

インド仏教の中のアビダルマ仏教を中心として、その中で展開された思想（時間論・空間論・涅槃論など）を研究した1冊。（永田文昌堂 6300円）

・『マンガ 仏教の思想—仏陀、かく語りき—』

蔡志忠作画 玄侑宗久監訳 瀬川千秋訳

仏教は仏陀が説いた「心のあり方」の思想。

いま求められる仏教の智慧！！（大和書房 1365円）

《イベント》

～ 夏から秋にかけて行われる仏教イベントです。 ～

・特別展 聖地寧波 日本仏教1300年の源流

～すべてはここからやって来た～

中国を代表する港湾都市、寧波（ニンポー）。日本と中国を結ぶ海上交通の一大拠点として発展してきましたが、長らく日本人を魅了し続けたのは、この町を中心に栄えた最新の仏教文化でした。遣唐使の時代以来、寧波にある普陀山（ふださん）、阿育王寺（あいくおうじ）などの聖地を目指し、多くの僧侶たちが日本から巡礼に訪れたのです。

本展では、寧波のこうした仏教の聖地としての側面に光を当て、かの地から海を越えてもたらされた仏教美術の名品を一堂に会し、その魅力に迫ります。

日時：平成21年7月18日（土）～8月30日（日）

会場：奈良国立博物館 東・西新館

休館日：毎週月曜日

※ただし7月20日（祝）と8月17日は開館し、7月21日（火）は休館

観覧料金：一般1200円、高校・大学生800円、小学・中学生500円

・第59回 法隆寺夏季大学

昭和25年、「聖徳宗」を開宗した法隆寺では、翌26年から太子教学を広めるために「法隆寺夏季大学」を開校しています。当代一流の学者や研究者を招いて仏教や仏教史、仏教美術・建築・考古学など、法隆寺と聖徳太子に関連したテーマを中心に、3日間にわたって講義が行われます。その間に法隆寺の見学や4日目にはバスツアーの見学も組み込まれています。

日時：7月26日～29日

会場：法隆寺「聖徳会館」

募集人数：700名（満員になり次第締め切ります）

申込資格：満15歳以上。真夏に行う行事ですので、平素から通院されたり持病のある方、または体力に自信のない方はご遠慮下さい。

申込金：会費3000円

申込方法：下記法隆寺ホームページ内より申込用紙をプリントアウトして必要事項を記入の上、会費を添えて直接持参されるか、現金書留便にてお申し込み下さい。（申込みの受付は6月1日より寺務所にて行います）

<http://www.horyuji.or.jp/kakidaigaku1.htm>

お問い合わせ：0745-75-2555

・現代教化フォーラム「脳科学と教育」

今回は、脳科学者小泉英明先生をお招きして「脳科学と教育」のいまとその目指すところをお話しいたきます。出生から幼少期に何が必要なのか、なぜ情操教育が大切なのか、研究で実証された最新の成果と今後の見通しをお話しいたきます。わが国の教育のあり方を考える絶好の機会となります。また、本宗の推進する「青少幼年教化」「寺子屋」の重要な視点ともなります。ぜひご参加下さい。

日時：9月4日

会場：東京愛宕 総本山智積院別院 [真福寺](#) 地下講堂

受講料：無料

申込：智山教化センターまで 電話、FAX・E-mailでお申し込みください。

TEL 03-3431-5218

FAX 03-3431-5219



特別セミナーの様子

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※ 勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。(会員は無料です。)

《定例全体研究会》

定例全体研究会では、仏教青年会・仏教会からの報告・会議と渡辺章悟先生の「『大智度論』を読む」を行っています。時折、外部講師を招いての特別講演会等行う場合もございます。

【開催予定日】

第4回7月22日(水) 14:20～16:10

第5回10月28日(水) 14:20～16:10

第6回11月25日(水) 14:20～16:10